

〈書評〉

中世の学問観と、現代の「文系・理系」
隠岐さや香『文系と理系はなぜ分かれたのか』

（星海社、二〇一八年）によせて

阿部 晃 平

（本学文学研究科史学専攻博士後期課程／日本学術振興会特別研究員DC2）

「文系」と「理系」という聞き慣れた知識の区分は、いったいいつ、そしてなぜ生まれたのだろうか？現代人（少なくとも日本人）にとっては、さも当然のように語られるこの峻別は、一度立ち止まって考えてみるならば、それが自明の理でも不変の概念でもないことは誰にでも分かるだろう。しかし、その理由と過程を問われたならば、多くの人が答えに窮することは想像に難くない。本書は、「文系・理系」という分類の形成を歴史的に追いつつ、現代社会においてこの区分がもたらす、しばしば論争的な問題について綿密に分析している。

二〇一八年八月の刊行直後より本書は大きな話題を呼んだ。朝日新聞や読売新聞など各新聞社による書評はもとより、本書のタイトルを検索するだけで、アカデミック、ノン・アカデミック問わず多数の書評がヒットすることからも、その注目度の高さがうかがい知れるだろう。さらに、中央公論新社主催の新書大賞（二〇一九年度）では第二位に輝き、世間一般においても非常に高い関心と評価を本書が得ていることは疑いがない。その背景と

しては、昨今の「理系」重視の社会的風潮とともに、二〇一五年頃に大きな社会問題となった国立大学における文系学部廃止論争の記憶が未だに新しいことや、著者も冒頭で述べているように、そもそも「文系」と「理系」の歴史を総合的に扱った研究が国内外にほとんど存在しなかったことが挙げられよう。生産的とは言い難い両立場の非難ないしは擁護論の応酬は多々あれど、フラットな視点から歴史的経緯とともにこの問題を分析したものは意外となかった。それを為しえたのは、無論、著者自身の力量も然ることながら、著者が「科学史」という文系と理系の狭間に位置する領域を専門としていることも大いに関係しているだろう。著者の隠岐さや香氏は、啓蒙主義時代の科学アカデミー研究を専門とし、多数の受賞歴も持つ新進気鋭の学者である。近年ではその傍ら、「文系と理系」概念に関する論考を多数上梓しており、本書はそのひとつの集成と目される。そのような意味においても、本書は重要な価値を持つと言える。

ところで、学問を分類するという営みそれ自体は、一体いつから行われていたのだろうか？一二世紀頃に成立した大学においてからだろうか。著者が重視する教育制度の面（各学芸学部が個々の学問領域に対応するような体系の構築）から見れば、たしかにそうも考えられるかもしれない。ただ、ひとつ言えるのは、古代ギリシア世界において、「学問」、つまりある事柄や現象の説明を神の気まぐれに帰すのではなく、理性的な推論をもって合理的に探求しようとする営為が生じたときより、その領域の策定も始まっていたことである。もちろん、「文系・理系」の分類が当時からあったわけではないし、今現代の分類を対象とした問いを立

てるにあたつて、学問の「近代化」を分水嶺に据え、それ以降の時代に焦点を絞る著者の選択は適切であろうが、この点は今一度考察されてもよいだろう。

本書はすでに刊行から三年以上経っており、多くの識者による論評も出揃っているなか、二〇二二年にもなった今になって書評を執筆するのは遅きに失している観が否めないが、「文系・理系」を越えた学問の分類という営み全体の歴史を俯瞰することにより、現代の分類の意義をより深く知るための一助となることを願ひ、本書評を上梓する。とはいえ、古代から大学成立に至るまでの過程を全て扱うのは、評者の力量からしても紙幅からしても難しいため、評者が専門とする初期中世（六―一二世紀初頭まで）に絞って見てみたい。前半部では本書の内容を検討しつつ評者なりの所感を述べたのち、後半部においてそれ以前の時代の分類思想を概観する。

本書の構成は以下の通りである。

第1章 文系と理系はいつどのように分かれたか？

― 欧米諸国の場合

第2章 日本の近代化と文系・理系

第3章 産業界と文系・理系

第4章 ジェンダーと文系・理系

第5章 研究の「学際化」と文系・理系

大きく分けてみれば、1章と2章は「文系・理系」の歴史的な成立過程を分析し、3―5章において現代社会との関わりにおけ

る「文系・理系」をめぐる各テーマごとの議論がなされている。

まず、第1章では、表題にもあるとおり、欧米諸国における「文系・理系」概念の起源が辿られる。中世の大学における学芸学部構成と自由学芸の概要について触れられたのち、中世ヨーロッパにあつた区分は、文系・理系といったものではなく、分野ごとにおけるヒエラルキーであつたと著者は述べる。奴隷制社会に起源をもつヨーロッパ社会において、肉体に関わるような手工業的・技術的諸学芸は軽視されており、そのような世界観のもとに成立した大学においては、当然理工系の学部はなかつたのである。これらの知識を扱う分野が教育制度に組み込まれるようになるのは一九世紀であつた。では、その間に何が起こつていたのであろうか。中世と近世のあいだに位置するルネサンス期において起こつた重要な変化、すなわち「新しい科学」という意識の芽生えについて、とりわけガリレオに注目して、著者は二点指摘する。一つは、自然を理解するために「実験」を行うという発想である。実験とはすなわち、人間が能動的に自然に干渉する行為であり、それまで自然を理解するための方法として一般的であつた「観察」とは根本的に異なる営為である。もう一点は、自然（現象）を理解するために数学が有用であるとの認識が広まつたことである。十七世紀時点ではまだ「数学を不可欠とする自然科学」という概念は生じていなかったが、その確立に向けた重要な布石をガリレオは築いたのだと主張される。

ガリレオによつて蒔かれた種―数学による普遍的な学問の可能性―は、人文主義伝統における「アカデミー」の文化によつて担

われたという。著者はここに、「教会と大学の外」における、より自由な文化の広がりを見ている。手工業蔑視の潮流は、英国で始まった産業革命および、フランス革命を契機とするアカデミーの停滞によって大きく変わった。とくにフランスでは、新たな共和国に必要な技師を育成するための専門学校エコール・ポリテクニークが発足し、この卒業生たちが後の時代における「工学」を成熟させていくのである。しかし、少しあとに指摘されるように、世界で初めて大学に工学部を設置したのは、日本の帝国大学であった。

次に、議論は人文社会科学の成立史に移っていく。この分野は、自然科学分野に比べて分かつていないことが多いという。無論、古代より法学や文学、歴史の研究はなされていたものの、それは「近代的」されていなかったと著者は述べる。この学問の「近代化」という視点は、本書においてとりわけ重要な意味を持つ。というのも、古代から現代にかけて連綿と続く学問分類の営みのなかで、「文系・理系」ないしは「人文系・社会科学・自然科学」の峻別を近代以降の産物として切り離して考えるための、要石となっているからである。著者はこの「近代化」を、「人間の世界について語る言葉が、宗教の規範や、世俗権力の支配下から自立した」と定義している（三八頁）。すなわち、身分制などの社会秩序や、カトリック教会による検閲・統制からの解放をもって、学問が「近代化」したのだと。とりわけ、人文社会科学分野ではその影響が顕著であった。政治の領域が宗教的な道徳から切り離されたことにより、ホッブズやルソー、モンテスキューなどによる法学理論が生まれ、人間中心的な意識の芽生えは、聖書中心の歴史認識を

変えていった。そして、人文主義者たちによる批判的なテキスト分析に基づく文献学の成熟は、のちの「人文」系のアイデンティティを形作ったとされる。

さらに時代が下り、一八世紀の後半になると、資本主義経済の活発化とともに、人間の道徳心や商業活動、政治活動といった社会現象を理解するための科学を作ろうとする潮流が起きたと著者は言う。当初は輪郭の定まらない多様な思想の集合体であった社会科学（一九世紀では道徳科学とも呼ばれた）は、国ごとに独自の展開を遂げていくが、自然科学の方法論をモデルに、人間の行動や社会の活動を一般化し法則を見出そうとする営みのもとでまとまっていた。

時系列的に言えば、「自然科学・工学」↓「社会科学」↓「人文科学」の順にまともな意識が生まれていったと著者は述べるが、その背景には、自然界に対する知識と、人間およびテクストについての知識という分類が意識されていた。前者は自然科学として扱うことができ、後者については、人間社会を対象としているものの、そのなかでまず、部分的には定量化や一般化が可能な経済学や社会学が最初にまともな意識を持ち、後に歴史学や文学研究など、自然科学的な方法論が適用できない分野が、「人文科学」としてのアイデンティティを獲得していくとする整理は、非常に分かりやすい。

続く第2章では、「文系・理系」概念の形成を、日本の近代化の過程から論じている。はじめに、前述のヨーロッパ的な考え方が本格的に流入する明治維新以前の時代における学問観について語られる。日本に限らず、中国も含めた東アジア社会の精神世界

では、「自然のことを考える」とこと、「社会や人間について考える」ことが区別されていなかったため、そもそも自然科学と人文社会科学といった分け方も生じ得なかったという。

一八世紀から一九世紀にかけておこった「蘭学」や「洋学」のブームによって、日本は西洋の学問と対面することになるが、幕末の洋学においては、科学計測器具や、砲術、建築術、航海術といったような軍事技術に関心が集中し、人文社会科学には経済学に多少の関心が払われる程度であった。明治期に入ると、様々な専門分化した西洋の学問の全体像を知ることになる。とりわけ、ライデン大学に学んだ西周は、古代ギリシアの基礎教養概念であるエンキュリオス・パイデアを「百学連環」と訳し、その全体像を日本に紹介したことは有名だろう。西洋の分類体系とその日本語訳をめぐる議論が学者たちのあいだで続くなかで、「文・理」という言葉は学校制度や官僚制度の改革を通じて、徐々に世に定着していったと著者は述べる。一八七七年に設立された東京大学では、法・理・文・医の四学部が設置され、八六年には工学部が、一九一九年には経済学部が追加された。とりわけ大きな影響を与えたのが、中等教育について定めた第二次・高等学校勅令で、「高等学校高等科ヲ分力チ文科及理科トス」と書かれている通り、これ以降、大学進学に際して、文系志望・理系志望を二分する方式が定着していったと述べる。

章の最後では、二度の対戦を経て「科学技術立国」としての地位と自負を獲得した現日本社会において、しかし未だに理工系偏重の傾向が見られることに警鐘を鳴らしている。大戦期において科学技術が重んじられたのは然もあれ、当時に比べてはるかに高

度な経済や政治のシステムが構築され複雑化した今日において、どのような知性が求められるのか問うている。

第3章では、これまでの歴史的議論とは打って変わり、現代日本における産業界のニーズや、それに付随する学生の進路選択の問題などについて論じられている。著者によれば、「文系・理系」の二分概念は、先に見た教育制度だけではなく、産業界においても顕著に見られるとはじめる。

前半部では、労働市場が求める人材の問題、引いては文系・理系の就職問題について扱われている。とりわけ文系に関しては、就職活動に際して、大学で学んだ専門知識はあまり求められないのではないかという一般通念に対し、企業の採用担当者に対するヒアリング調査のデータを引用しつつ、確かに一部領域を除きさほど文系の専門知識は期待されていないものの、文書作成能力や教養の広さには関心が持たれていると述べる。対する理系は、一般に文系よりも専門知識が囑望されているが、それはどこまで求められているのか、換言すれば修士・博士号を持っていた方が就職に有利なのか否かという問題が議論されている。いくつかの統計データから見ると、修士卒までは高い就職率を誇るが、博士卒になるとその値が下がるという。著者はこの点について、分野による違いも指摘しつつ、求められる専門性の「程度」の問題だと指摘している。また、欧米諸国、とくにアメリカは、日本とは異なり、博士課程の就職も比較的スムーズに進んでいるという。そこには、「新卒一括採用」というシステムがなく、また博士人材は外部資金を獲得してくれるというイメージがあるとしている。評者としては、日本企業の場合、なぜ高度な専門性をあえ

て忌避するのか、もう少し踏み込んだ説明があつてもよかったと感じる。おそらくその背後には、採用時の年齢の問題や、特定分野に特化した知識よりも柔軟な頭脳の方が求められている―著者はみもふたもない書き方と述べているが―という、理論的には説明したい人の心性も、勿論職種によりけりであろうが、やはり少なからずあるのではないだろうか。

一章の後半部では、大学と産業界のあるべき関係性について論じられる。著者は二〇一五年頃に起こった「文系不要」論争を引き合いに出し、「儲かる理系」と「儲からない文系」という価値観の浸透を見ている。これは日本国内のみの問題ではなく、その背後には大学資本主義、つまり市場において経済的価値を持つ諸分野を優遇し、それ以外については資金の投入を減らそうとするグローバルな傾向があつた。そもそも、「儲かる理系」という発想はどこからきたのだろうか？著者曰く、それは英米の経済学者たちによつて唱えられた「イノベーション政策1・0」であつた。この指針は経済成長の要因を技術の変化に求めたため、理工系教育・研究の振興と経済成長が直線的に結びつけて考えられようになつたのである。一九七〇年代に経済停滞が見られるようになると、次は産業界と大学などの研究機関が連携して開発を行う「イノベーション政策2・0」が始まつたが、これによつて、大学での研究成果、引いては知識そのものが直接富に結びつくようになり、理工系が儲かるというイメージが確立されたのだとされる。ただし、日本ではそれが上手く育たず、産業構造転換が十分に起きていないため、文系・理系ともに大学院以上の高学歴を必要としない社会になっていると分析している。日本における学位軽視

の傾向を、イノベーション政策による産業構造の転換の失敗に見出す著者の指摘は見事であり、より強調されてもよいだろう。

最後に、「イノベーション政策3・0」の到来について語られている。「イノベーション政策2・0」が浸透していた世界は、しかし近年では環境問題や経済的な不平等、ジェンダー格差など、さまざまな社会問題を惹起した。それに対処するため、人文社会科学の知識が必要であるという考え方、すなわち「イノベーション政策3・0」が欧州を中心に近年盛り上がりを見せているという。これにより、人文社会科学と自然科学・技術を繋げられる人材の視点が重視されるであろうという展望が述べられ、本章は締められている。

第4章では、性差の問題が扱われている。日本は進路選択における男女差が大きい、具体的には、理工系と社会科学系を選択する女性の数が欧米諸国と比較して顕著に少なく、逆に福祉や家政学系が平均より多いことが指摘される。ここから著者は、男女における「分野適正」、つまり知性に性差はあるのか否かという議論を展開していく。この問題は非常にセンシティブな側面を持ち、一步踏み外すと差別につながるが、著者は多様なデータを用いて、複数の側面から客観的に分析を加える。まず、知能テストに関するいくつかのデータから浮かび上がるのは、時代や地域、テストの内容によつて、結果にばらつきがあるということである。当然のことのように思えるが、かつて一般に考えられていたように、理系分野において女性は男性よりも知的に劣っているとは、少なくとも平均点の分布からは言えず、また点数差が男女間よりも国の間で大きく出る研究もあるという。そのようなばらつきが生じ

る要因として、著者は先行研究に依拠しつつ、「自信のなさ」と「問題の出題形式」の二点を挙げている。とくに前者については、「生まれつきの才能」という先入観が、歴史的に差別されてきた人種・民族、女性を特定の分野から遠ざけることにもつながっているのではないかと指摘する。では、実際に生物学的に性差はないのかという点については、確かに性差はあるが、それは生殖行動や情動に関わる、進化の段階から見れば古い部分であり、認知や言語機能については、結局のところはよく分からず、環境的な要因とも切り離したいという。また、特定の業種に適しているか否かを図るためには、認知能力の性差の考察だけでは不十分であるとも指摘している。

議論はジェンダー役割とステレオタイプに移ってゆく。日本において、男性が理工系に引き寄せられ、女性が遠ざかる（を遠ざけてしまう）理由として、中学～高校の段階で、女性は数学や科学に向かないことを（暗黙的であっても）教師が示してしまう問題を挙げる。進路選択の際にも、身近に感じている伝統的なジェンダー役割イメージの影響―男性は外で実務に携わり、女性は家事や子育てを行う―が大きいことや、またコンピュータゲームの普及により、その手の分野が男性向けというイメージを形成した例も引き合いに出している。このようなジェンダー格差の解消（これは男性の側にも等しく適用される）は、研究現場における多様性を増し、新たなイノベーションの創出につながるためにも、重要な課題であると主張する。

第5章では、昨今における学問横断的な傾向を概観しつつ、改めて文系・理系の関係について問い直されている。教育制度上か

ら見ると、依然として文系・理系の区別は見られるものの、近年では専門学部において「教養教育重視」の傾向が見られるという。リベラルアーツ教育とも言われるこの教育形態では、学生は主専攻を持ちつつも、人文科学、社会科学、自然科学を幅広く履修することができ、特定の専門知識に縛られない「教養」が重視されていると述べる。研究の世界においても、複数の分野間をまたぐ「学際化」の動きがあり、異分野の融合が進んでいるとされるが、評者が専門とする歴史学の領域でも、例えば、考古学は炭素年代測定といった科学的手法を積極的に利用しているし、文献史学についても、デジタル技術を積極的に活用していく人文情報学が市民権を得つつあるなど、その影響は顕著に見られる。その一方で、歴史的な視点からは、諸学は究極的には一つに還元されうるという考え方があった。人間社会の現象を自然科学的な原則に還元して理解しようとする「自然主義」や、すべての諸学は物理学を基盤として考える「物理主義」などがその例として挙げられる。

だが実際の現社会においては、むしろ学問の細分化が進んでいるのである。では、諸分野はどのような点で差別化されているのだろうか？まず自然科学について言えば、それが常に「法則定立的」、すなわち何らかの普遍的法則を見出す分野のように一見思えるが、例えばダーウインの進化論などは、同様の方法で繰り返し検証して証明された「法則」とまでは言えない。また、二〇世紀初頭まではすべての自然科学分野が物理学に還元可能だとの見方もあったが、近年の飛躍的な生命科学の進歩からは、必ずしもそうはならないのではないかという意見もあるとする。著者の指摘で興味深いのは、自然科学が多元的であるならば、人文社会科学

学との差も縮まる、つまり、「自然科学の多元論」は、「文系・理系をふくめ、バラバラの諸学がゆるくつながって一つである」とする「科学の（ゆるい）一元論」につながるという点である。この指摘は、「文系・理系」概念に留まらず、諸学の統一性あるいは独立性を今後議論する上で鍵となる部分だろう。人文科学と社会科学の関係についても、「個性記述的」な部分を重視する歴史学のような分野もあれば、そこから抽象した「法則定立的」な一般理論を考察する経済学、社会学など様々な程度があり、上記の多元論的な見方に結びつくことが分かる。詰まるところ、諸学の関係性はその方法論や手法、目的など視点によって一元的であり、多元的でもあるのである。さらに以下では、人文社会科学を「科学化」することによって起こる弊害が論じられる。とりわけ、生物学的議論を人間社会の行動と結びつけて考える社会生物学など、現実の社会が関わる分野では、かの悪しきナチス・ドイツの人種衛生学がそうであったように、政治的な問題を惹起することが指摘されている。著者はこの点、人間社会を扱う以上、学術的論争と政治的論争の境界が不明瞭になるのはやむを得ないし、だからこそ論争が必要だと述べる。このような論争は、結局のところ、人間は何らかのバイアスから避けられないことに起因しているわけだが、むしろそこに様々な分野が存在する本当の意義があるのではないかと全体をまとめている。

以上、本書の内容を概観した。冒頭でも述べたように、全体を通じて非常にフラットな論調が貫かれている。何らかの偏り（博士卒の就職難問題や、「儲かる理系」イメージなど）を論じる際にも、あくまで統計データなどから抽出される客観的事実を提示

し、それに対する解釈を先行研究に基づきながら提示するという体裁が一貫して採られている。その際、複数の研究、考え方が並列的に紹介され、読者自身に考察を促す構成になっており、またテーマから見ても、就職活動やジェンダー観、学問の「学際化」など、近年関心が集まっているテーマをピンポイントで捉えている。そのような意味においては、「文系・理系」を論ずるための最良のガイドラインとも言えるだろう。一方で、客観性を重視したがいえに、各テーマにおける著者自身の主張があまり見えてこない面もある。無論、客観性と著者の主観性はトレードオフの関係にあるため、本書の性格上致し方ない部分かもしれないが、例えば第5章で議論されている諸学の還元性の問題などについては、文理両分野に関わる専門家としての、著者なりの見解を知りたいと思う向きもあつただろう。また、1〜2章の歴史を扱う部分では、著者自身も述べるとおり、これまであまり体系的に分析されてこなかったため、それだけでも重要な価値を持つであろうことは疑いがないものの、学問の「近代化」、すなわち脱宗教・脱世俗権力を分水嶺とする考え方には、もう少し補足があつてもよかったかもしれない。つまり中世の学問体系との断絶性と連続性についてである。また、啓蒙主義期の例としてデイドロとダラベンベルによる『百科全書』を紹介しているが、彼らによる「記憶」「理性」「想像力」という視点からの分類は、およそ一世紀半前のフランシス・ベーコン (Francis Bacon, 1561-1626) に遡る考え方である。そのため、「文系・理系」の成立を時系列順に整理していくなかで、その位置づけが若干浮いてしまっているように思える。ベーコンの分類理論はスコラ的な伝統からの脱却のメルク

マールと目されており、やはりその延長線上で理解するか、あるいはデイドロ、ダランベールとベーコンの思想の違いに言及する必要があるだろう。そのような点も踏まえ、以下では「近代化」以前の学問分類について、少し補足的に見ていきたいと思う。

大学成立以前の学問分類

一二世紀以降確立された大学における学芸学部liberal artsの分類は本書の冒頭ですでに述べられている通りであるが、無論、それ以前の時代にも知識の分類理論は存在していた。中世の学問観を扱う上でまず論じておくべきは、当然のことながら、社会のすべてが神を頂点としたキリスト教的世界観のもとに成立していたことである。学問の分類に際しても、その影響は極めて如実に現れている。

ペトルス・ダミアヌス (Petrus Damianus, 1007-72) の「哲学は神学の婢 *philosophia ancilla theologiae*」という有名な言葉に示されるように、人間の理性によって探求される哲学と、信仰に基づく神学との関係性は、中世の学問観を根底から揺り動かす重大な係争点であった。この問題は、古くは二世紀頃にアレクサンドリアで活動していた教父たちにまで遡る。かれらはそれまでヨーロッパ世界が継承してきた、キリスト教徒から見れば異教的な古代ギリシア以来の学問的知識に対していかに接するべきかという問題に直面した。異教の知識の内には、キリスト教教義に反する教えや、道徳的に看過しがたい内容も含まれていたからである。世俗の古典の読書はどこまで許容されるのか（あるいは筆写されるべきか）という問題と直に関わるこの対立は、初期中世における教育と写本生産の場であった修道院附属学校において強く意識

されていたが、一先ずはアウグスティヌスの解釈、すなわち世俗的知識も聖書理解に資する限りにおいて有益だとして、世俗的知識と宗教的知識とのあいだに明確なヒエラルキーを指定する見方（換言すれば、論理学や天文学など個々の学問はそれ自体を「目的」として探求されるのではなく、あくまで聖書理解のための「道具」として理解する見方）が浸透したことにより、一旦の解決をみた。しかし、一二世紀以降ヨーロッパを席卷したアリストテレスの著作群の回復に付随する個々の学問の専門化によって、今度は大学という場において、哲学（部）と神学（部）の対立が惹起されることになる。そこに至るまでの過程について、四つの側面から見ていこう。

自由学 *artes liberales*

中世ヨーロッパには、本来的には相異なりながらもときに重なり合う、二つの主要な分類概念が存在した。ひとつは「自由学芸 *artes liberales*」であり、他方は「哲学」*philosophia* である。前者は古代ギリシアの *ἐγκύκλιος παιδεία* をキケロがラテン語訳したものであり（のちに西周が「百学連環」と訳す言葉である）、より上位の哲学と対比して、古代において学ぶべきと考えられていた基礎教養科目の分類を指していた。そこにどのような科目を指定するかは人物ごとに多少の変動があるが、中世に通ずる大枠を据えたのは、ウァロ (Varro, 116-27 B.C.) であったと言われる^①。かれは自由学芸を、文法 *grammatica*、修辞学 *rhetorica*、論理学（弁証法）*logica/dialectica*、算術 *arithmetica*、幾何学 *geometria*、天文学 *astronomia*、音楽 *musica*、医学 *medicina*、建築学

architectonicaの九つに区分した。そのうち、後世に絶大な影響力を及ぼすことになるマルティアヌス・カペッラ (Martianus Capella, 5c)の『フィロロギアとメルクリウスの結婚』(以下『結婚』)において、これら九つの学問うち、医学と建築が排除されたことにより、残りの七つの学芸、すなわち七自由学芸 *septem artes liberales* が中世における基礎教養科目として確定付けられることになった。^② 全九巻からなるカペッラの『結婚』は、ギリシアの神々によって主催された、擬人化されたフィロロギア (愛する *philo* + 言葉/理性 *logos* から。好学の精神とも訳される) と、メルクリウス (古代ローマにおける雄弁の神) との婚姻と結婚を描いた寓話作品である。フィロロギアは結婚の祝儀として神々から七人の侍女を与えられるが、この侍女たちが七自由学芸の擬人化であり、各々が自己紹介をする体裁のもと、各学芸の概要が語られる。^③ 内容自体は初歩的であるものの、寓話形式の分かりやすさが好評を博し、修道院附属学校における自由学芸の教育用テキストとして非常に広く利用された。この“七つ”の学芸は、のちに聖書との関連づけによって強化・教化され、キリスト教徒が学ぶべき教養としての認識が広く浸透してゆく。^④ なお“自由 *liberales*”という訳語をキケロが用いたのは、古代の奴隷制社会にあって、奴隷とは異なる市民権を持った自由人が学ぶべき教養という意味においてであったが、中世では、例えばキリスト教との関連において、「魂を地上の煩わしさから解放し *liber*at、またそれを創造主についての理解のために準備させることから、自由 *liberales* と呼ばれるのである」と言われたり、^⑤ あるいは、「文法学は、言うまでもなく自由学芸 *liberales litterae* の端緒であり基礎である。とくに、

書物 *liber* という語は、自由 *liber* に由来する。それは、木から剥ぎ取られた *liberatio* 樹皮のことである」として、書物 *liber* と自由 *liber* を関連付けるなど、多様な解釈が存在した。^⑦

この七自由学芸は、言語規則を扱う三学 (文法学、修辞学、弁証法) と、数や量を扱う四科 (算術、幾何学、音楽、天文学) とに分けられ、一般に前者はトリウィウム *trivium*、後者はクアドリウィウム *quadrivium* と呼ばれていた。^⑧ 一見、現代の文系・理系の区別に似ているように見えるが、必ずしもそうではない。隠岐氏が述べるように、現代における分類を諸学問の「近代化」以降の産物とするのであれば、七自由学芸の分類はその遙か以前の話であり、クアドリウィウムに属する“理系的”学問群も、ただ数によって“のみ”探求されうるものだとは考えられていない。中世では数学と幾何学はまったく別の学問領域と考えられており、代数幾何学も存在しなかった時代において、自然現象をすべて数学のもとに記述できるという発想が、そもそも存在しなかった (第一章で論じられているように、そのような発想が生まれるのは一七世紀である)。また、算術や幾何学に並んで、音楽がクアドリウィウムに分類されていることを奇妙に思う向きもあるかもしれないが、それは音楽 *musica* が当時は音階、すなわち比例数を扱う学問であると考えられていたためである。

七自由学芸におけるトリウィウムとクアドリウィウムの峻別がいつ頃から生じたのかは定かではないが、少なくとも六世紀のカッシオドルス (Cassiodorus, ca. 485-ca. 585) やボエティウス (Boethius, ca. 477-524) は、クアドリウィウムを共通する特性を有する一群の学問と考えていた。カッシオドルスはこれを

mathematica あるいは *decolorialis* と呼び、「抽象的な量を考察する知識」と定義している⁽⁹⁾。抽象的な量とは、数や線など、理性が直接捉えることのできる対象のことである。ポエティウスはさらに踏み込み、『算術論』*De arithmetica* において、数そのものを扱うのが算術、相対的な数を扱うのが音楽、制止している大きさを扱うのが幾何学、運動している大きさを扱うのが天文学と述べ、各前者は各後者に基づくものとして、四科間の秩序関係を説いた⁽¹⁰⁾。つまり、クアドリウィウムの分類の視点は、連続量（大きなないしは広がり *magnitudo* に関わり、静的対象は幾何学、動的对象は天文学が扱う）と不連続量（多さ *multitudo* に関わり、数それ自体は算術、数の関係性は音楽が扱う）に置かれている。

一方で両者とも、少なくともテキスト上では、文法学、修辞学、弁証法を、何らかの特性を共有する一群として明確に位置づけていない。言語規則を扱う三学と、数や量を扱う四科という対照的な構図が現れはじめるのは、九世紀中頃から後半にかけて流行した、カペッラの『結婚』の註解においてである。『結婚』の原典では学芸の分類についてはとくに語られていないが、ヨハネス・スコトゥス・エリウゲナ (*Johannes Scottus Eriugena*, ca. 800-ca. 877) やオセールのレミギウス (*Remigius of Auxerre*, ca. 841-908) といった九世紀の知識人たちは、フィロロギアとメルクリウスの結婚について、それぞれ理性 *ratio* あるいは知恵 *sapientia* と、言葉 *sermo* あることは雄弁 *facundia sermonis/eloquentia* の統合を描いていると解し⁽¹²⁾、抽象的な思考をなす理性ないしは知性に存立する四科と対比して、文法学、修辞学、弁証法を言葉 *sermo* を扱う学芸として峻別した⁽¹³⁾。クアドリウィウムと

は異なり、トリウィウムの分類の視点は時代や人物によって異動が見られる。一般的には、文法学は正しく話し書くための規則であり、また詩人や歴史家の書き物を解釈するための知識とされるが、後者は修辞学とも密接に関わっている（現代で言う文学研究に近い内容を含意している）。一方で、修辞学はおもに公的場における弁論の技術を指していたが、論証を扱うという点においては、物事の真偽判断を扱う弁証法（論理学）とも多分に共有する部分がある⁽¹⁴⁾。ただ、いずれも言語規則を扱うという点においては共通しており、トリウィウムとクアドリウィウムの分類は中世を通じて一般的なものとなっていく。

機械学 *artes mechanicae*

自由学芸との対比においてよく取り上げられるのは、機械学芸 *artes mechanicae* と呼ばれた諸学芸であり、ある意味で中世における学問の“ヒエラルキー”の存在を示す例でもある⁽¹⁵⁾。前近代のヨーロッパ全体に通底する観念として、一究極的にはかつての奴隸制社会に起因する考え方だが―手作業を伴う学芸（例えば、農耕術や建築術など）は、精神によつて探求される自由学芸や哲学に比して、一段劣つた知識と見做されていた⁽¹⁶⁾。本書でも、工学系の学部形成が遅れた理由として取り上げられていた通りである。カペッラが『結婚』において建築学と医学を自由学芸から排除した理由は、それら二つの学芸が「死すべき事柄 *mortalis res* を慮り、その技術は俗世の物事に関わる」からであった⁽¹⁷⁾。この観念は、肉体よりも魂、あるいは活動的生活より観想的生活を上位に据えるキリスト教的世界観の浸透と相まって、一段と強化された面が

あったことはよく指摘されることである。⁽¹⁸⁾だが、機械学芸に属する知識も人間の生活には必要不可欠なものであり、とりわけ修道院世界においては労働もひとつの美德と考えられていたために、初期中世に限ってみても、必ずしも常に低い評価が与えられた訳ではない。そのような学問観を示す史料として、七世紀末から八世紀の初頭頃にアイルランドで書かれたと考えられている、クイムナムスという人物に宛てた逸名註釈家によるラテン語の文法書は、特筆されてもよいだろう。⁽¹⁹⁾この著作の冒頭では学芸の起源やその分類、文法学の重要性について論じられているが、それによれば、学芸 *ars* は三つの類 *genera* に分けられる。⁽²⁰⁾

① 魂に関わる学芸 *ars animi* :

哲学、法学、修辞学、文法学、占星術、音楽、詩学。

② 身体に関わる学芸 *ars corporis* :

運搬術、競争術、跳躍術、投擲術。

③ 魂と身体の両方に関わる学芸 *ars animi et corporis* :

航海術、商術、建築術、農耕術、格闘術。

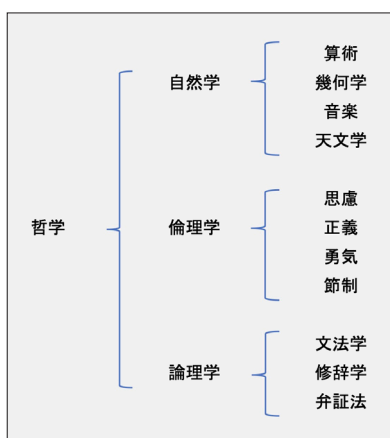
この区分論における分類の視点は、各知識の目的や対象、手法などではなく、身体と魂との関わりに置かれていることは、見ての通りである。しかし、この逸名註釈者は三つの類に優劣をつけている訳ではない。かれの学問観では、魂に関わる学芸であれ、身体に関わる学芸であれ、すべての学芸や言語、知識は人類の始祖たるアダムにおいて、分かたれず *indivissibiliter*、根源的に *originaliter*、そしてすべての学芸の原因として *causali* 備わって

おり、アダムの子孫たちが各学芸をそれぞれ形作っていったと考えられている。⁽²¹⁾そこに魂と身体の優劣関係はまったく見られない。

似たような文脈において、機械学芸を一つのまとまったグループとして初めて提示したのは、先にも見たエリウゲナ（とそれを継承したレミギウス）による『結婚』の註解である。『結婚』の第二巻末において、フィロロギアの母であるフロネーシスは、メルクリウスの差し出す七人の侍女、すなわち七自由学芸の返礼として、フィロロギアもメルクリウスに贈り物 *pos* を与えるよう求めているが、この贈り物についてはその後作中でいっさい触れられることはなく物語は終わる。⁽²²⁾そこで、エリウゲナら中世の註釈者たちは、この贈り物のことを、自由学芸の対となる機械学芸を示していると解釈したのである。⁽²³⁾かれは、自由学芸を「魂の内と自然と理解される学芸」とし、機械学芸は「何らかの模倣や人間の工夫による学芸」と定義している。⁽²⁴⁾すなわち、前者は人間の魂に備わっている内的な知識（ただし原罪によって不完全な状態にある）、後者は自然に対する人間の外的な関与の産物であり、後天的に獲得された知識という視点から区別されているわけだが、両者に優劣関係についての言及はなく、あくまで並列的に語られているのである。⁽²⁵⁾エリウゲナらは機械学芸の内容については論じていないが、彼らの思想は一二世紀のサン＝ヴィクトルのフーゴ（Hugo of St. Victor, 1086-1141）に継承され、機械学芸の復権の布石となっていく。⁽²⁶⁾

哲学 *philosophia*

次に、哲学 *philosophia* の分類についてみてゆこう。哲学と

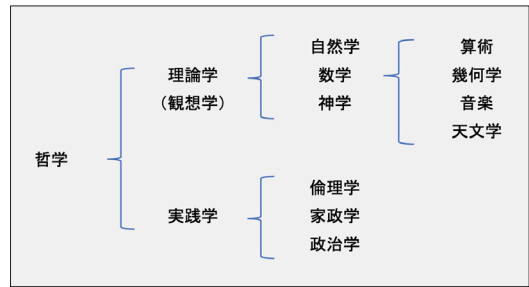


【図1】プラトンの区分法（評者作成）

は、自由学芸との対比においては、それらを学んだあとに探求されるべきより専門的な知識という位置づけであったが、広義では自由学芸および神的な学問をも包括しうる知の総体という意味合いでも用いられた概念である。⁽²⁸⁾ 中世を通じて広く読まれたイシドルス (Isidorus, ca. 560-636) の百科全書的著作である『語源考』を引けば、哲学とは「善く生きることに関わる、人間のおよび神のことからについての知識」あるいは「人間に可能な限りの蓋然的な知識」であり、九世紀のクレメンス・スコトゥス (Clement Scottus, fl. ca. 814-826) に言わせれば、「神の恩寵に刺激されて知恵を学ぼうと欲する者はみな、哲学とは何たるかを知らねばならないが、それはすべての学芸と学問の泉であり、あらゆる徳の教師」であった。⁽³⁰⁾ 前述のエリウゲナやレミギウスは、「哲学を通じてでなければ、何人たりとも天国に入ることとはできない」とも述べているように、一二世紀以降顕著となる哲学（＝理性に基づく学問領域）と神学（＝信仰に基づく学問領域）の関係性をめぐる

大論争は、初期中世においては未だ表面化しておらず、神に関わる知識も哲学に包括されとの見方が強かった。⁽³²⁾ 七自由学芸とは異なり、哲学には多様な分類論が存在したが、現代のそれ

とは根本的に異なる二つの主要な「型」が普及していた。⁽³³⁾ ひとつは、プラトンに由来すると当時考えられていた分類方法である【図1】。この理論は、厳密にはプラトンによるものではないが、アウグスティヌスなど特段の影響を持つ人物がプラトンに帰したことにより、中世ではプラトンの区分別法として認知されていた。⁽³⁴⁾ ここでは、哲学は自然学 *physica*、倫理学 *ethica*、論理学 *logica*（ないしは言語に関わる学問）の三部門に分けられる。自然学はこの世の自然現象を探求する学問（現代の「物理学 *physics*」とは異なる）であり、四大枢要徳を下屬させる倫理学は善く生きるための生活の秩序を扱い、論理学は、狭義では三段論法のような物事の真偽を判断する推論の技術であるが、広義では言葉を扱う学問（＝トリウィウム）を包括する。⁽³⁵⁾ ここでは、自然を扱う学問と、人間の道徳に関わる学問を分ける発想がすでに見て取れる。また、この三分法においてとりわけ興味深いのは、キリスト教との関連において、論理学の位置づけが変動したことである。古代ローマのストア派やキケロは、これを明らかに言語規則や推論を扱う学問と見做していたが、二五世紀頃に活躍したキリスト教神父たちは、しばしば論理学 *logica* を神的な学問、すなわち神学 *theologia* に置き換えることがあった。⁽³⁶⁾ 三世紀にアレクサンドリアで活躍した神父の一人であるオリゲネス (Origenes, ca. 185-ca. 254) のように、三つの学問に加え、観想学（＝神学 *enortukh/inspectiva* を別途指定する場合もあれば、ヒエロニムス (Hieronymus, ca. 347-420) のように「われわれ（キリスト教徒）は神学 *theologia* を論理学にあてがっている」と述べ、両学問を結びつけて論じている例もある。⁽³⁸⁾ どのようにしてこの発想に至っ



【図2】アリストテレス的区分法(評者作成)

たのか、先行研究においても正確には明らかにされていないが、ある意味ではプラトンの区分法に神学的学問の位置づけを見出そうとした一つの結果なのかもしれない。いずれにせよ、この三分法自体はイシドルスやアルクイン、ラバヌス・マウルスらが取り上げたことによっても広く知られるところとなり、一三世紀近くまで影響力をもった。

もう一方の主要な「型」は、アリストテレスに由来する分類理論である【図2】。アリストテレスは、哲学を理論学 *theoretica* と実践学 *practica* の二つに分け、前者は必然的な真理の認識を目的とし、後者は人間の欲求や意志に基づく非必然的な行為を探索するという点から分類を行っている。前者に属する三つの領域は、質料からの抽象の程度によって分けられている。自然学 *physica* と数学 *mathematica* は質料に依存する対象を扱うという点については共通しているが、前者は、「人間」など、現実の事物としても概念上でも質料に依存する対象を扱う一方で、後者は「数や線」といったような、概念上では質料から抽象して捉えることの出来る対象に関わるという点で差別化されている。神学 *theologia* では質料に依存せず形相のみで存立可能な霊的な事物や神そのものが考察される⁽¹⁰⁾。他方、実践学においては、人間の

行為においてなされるべき善が探求されるが、その対象とする範囲によって区分されており、倫理学 *ethica* は一個人の、家政学 *oeconomia* では家庭内の、政治学 *politica* では大衆の善が扱われる。理論学と実践学の二分は、本書の第1章で取り上げられているヴィンデルバントによる「法則定立的」な学と、「個性記述的」な学の区別に通ずるものである。ただし、アリストテレス自身は、文法学や修辞学についてはあまり重視しておらず、論理学については他の学問を下支えする「道具 *organon*」と考えており、哲学の分類には組み込んでいない⁽¹¹⁾。

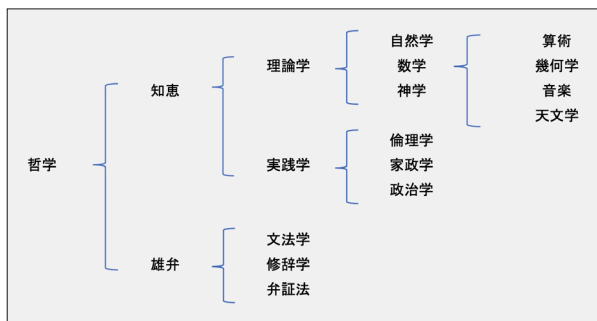
アリストテレスのこのような考え方は、しかしながら、ローマ帝国の崩壊による混乱とともにかれの著作の大部分が失われた結果、中世においてはその分類の枠組みだけが希釈された状態で辛うじて継承されたに過ぎず、個々の学問の内実についても、辞書的な定義しか知られていなかった(前記の図も希釈、改変された「中世版」である⁽¹²⁾)。そのような知的状況にあつて、キリスト教徒たちは、ある意味においてはオリジナルの定義に縛られることなく、自身の目的に沿うような独自の理論を築き上げていったのである。一二世紀にアリストテレスの原典が回復されるまでは、カッショドルス(およびそれを継承したイシドルス)による編集版がもつとも頻繁に参照されていたが、かれはアリストテレス的区分法を「キリスト教化」して提示したという点において特筆されるべき人物である。理論学に対して、かれは観想学 *inspectiva* というラテン語訳を対応させ、次のように説明している。「観想学と言われるのは、われわれが見られうる事柄を越えて、神的事柄や天上的な事柄について何らかのことを観照し、そうしたも

のは物體的な視野を越えているため、ただ精神だけによってのみそれらを直視するからである⁽⁴²⁾。この文言は、先に言及したオリゲネスの『雅歌註解』における、観想学（＝神学）の定義そのものである⁽⁴³⁾。さらに、倫理学や自然学の定義もオリゲネスから拝借しており、詰まるどころ、カッシオドルスはオリゲネスによる各学問の定義を、そのままアリストテレスの区分法の説明に転用（あるいは同一視）しているわけである。この改変は学問間の種類関係を壊しているため、内容的には矛盾をはらんでいるものの⁽⁴⁴⁾、その分類理論の本質が伝わらなかった初期中世において問題となることはほとんどなく、今度はカッシオドルスやイシドルスという権威を纏って、広範な影響力を持ち続けたのである。

なお、これら哲学の分類体系は、現代の大学の学芸学部のように、実際の教育制度と必ずしも対応しているわけではない。とりわけ初期中世においては、アリストテレス的な区分に見られる学問は、その内容を教えるかれの著作が失われていたことによって形骸化していたことには注意を要する。

諸学の一体性

ここまで、自由学芸と二つの哲学の分類理論を概観してきたが、これらの区分は相互に排他的なものではなかった。初期中世においては、別々の起源を持つ複数の体系の関連性について深く考察されることはなかったが、一二世紀初頭になると、これらはむしろ一つの体系として調和されるべきであるという考え方が、一部の知識人のあいだで顕著に現れ始める。その背景には、先にも述べたとおり、一二～一三世紀のヨーロッパを席卷したアリストテ



【図3】コンシュのウィリアムによる分類（評者作成）

レスの著作の回復があった。ちょうどこの時代はヨーロッパ社会全体の大きな変革期でもあり、農作技術の改良による生産物の増加に比例して人口も飛躍的に増大し、多くの余剰労働力を生み出した。かれらの一部は商人となり、中世都市の形成と発展に役割を果たす一方で、知識を求めて各地を旅する「遍歴学生」と呼ばれる人々が生まれたのである（その集団が大学の雛形となる⁽⁴⁵⁾）。アリストテレスの著作は分野ごとにいくつかの段階を追って翻訳されたが、まず論理学関係の著作が一二世紀前半にラテン語で読めるようになった結果、とりわけパリを中心として多くの学派が形成され、多数の学生を巻き込んでいった。端的に言えば、一二

世紀に至り、急速に学問の専門化が進行したのである。特定の学問の専門化（一二世紀初頭では論理学、一三世紀には自然学と神学）は、他方で一部の知識のみを学び、専門外の教養（自由学芸）を蔑ろにする傾向も同時に生み出した。ソールズベリーのジョン（John of Salisbury, ca. 1100-1180）が辛辣に語っているように、当時の社会には、論理学だけを学び、金儲けのことしか考えていない教師が蔓延していた⁽⁴⁶⁾。このような論理学一強の

時代潮流に対して、個々の学問の協調性を主張し、伝統的な自由学芸教育を重んじた知識人の一人であるコンシユのウィリアム (William of Conches, ca. 1090-1155) は、従来の様々な分類法を統合した新たな学問体系を提示した【図3】⁴⁸。かれは主著『宇宙の哲学』*Philosophia mundi*の冒頭で、次のように述べている。「キケロが弁論術書の序文で述べているように、知恵 *sapientia* なき雄弁 *eloquentia* は有害であり、また雄弁を欠いた知恵は、ほとんど役に立つものではなく、知恵は雄弁をともなうて最大限の有用性を發揮する以上、有益で害をなさない知恵を顧みることなく、有害で益をもたらさない雄弁に頼る者は誤りを免れない。そのような振る舞いは、(中略) 雄弁の神メルクリウスとフィロロギアとのあいだの結婚を解消するものだからである」⁴⁹。ここで語られているのは、事物を認識するためのクアドリウィウムを含む知恵と、言葉を正しく理解し、美しく飾る雄弁との調和を原則とするかれの教育理念である。ウィリアムの分類理論には新たな学問領域が追加されているわけではないが、「知識 *scientia*」を最上位の類として指定することにより、自由学芸と哲学の両方を一つの体系内に纏め上げ、『結婚』のアレゴリーをもって諸学の一体性を説いている。分類の観点から見れば、エリウゲナやレミギウスにおける知恵と雄弁の概念を拡張し、前者にアリストテレス的な哲学分類を組み込んだと言える。メルクリウスとフィロロギアの結婚を両分野の調和の象徴と見做し、その一体性を主張する論調は一二世紀前半によく見られるが、それは裏を返せば、それほど自由学芸の教育が崩壊していた証左でもある。実際、一三世紀を通じて、ヨーロッパ社会は個々の学問の専門化が急激に進み、後

世における学問の枠組みを形作っていくのである。

以上、四つの側面から中世の学問分類について概観した。神(ないしは聖書)を頂点とするキリスト教的世界観からの離脱を契機として、現代に通ずる「近代化」された学問の編成につながっていくという本書での見取り図は、非常に分かりやすく、適切な整理だろう。一方で、古代・中世には確固とした学問の分類体系が無く、曖昧模糊として存在していたさまざまな知識が、「近代化」の過程を経て体系化していくという見方をしてしまうと、歴史をつかみ損ねることになる。中世の学問体系では、たしかに神を頂点とするヒエラルキーを前提としていたが、そのうちにおいて、人間に可能な限りの知識(これはカッシオドルスの言葉だが)の分類には、「近代化」以降と近い発想がすでにあつた。学問全体を分ける根本的な発想から見れば、プラトンの区分法でもアリストテレスの区分法でも、人間自身の行為を扱う内的な領域と、自然を扱う外的な領域は、早い段階から区別して考えられており、遅れて文法学や修辞学の「人文学的な」諸学のまとまり意識が生じてきたという経緯は、ある意味では「近代化」以降の過程と似るところがあるかもしれない。また、学問の専門化によって、一方では学問の全体像が見失われ、それに対し分野を跨いだ横断的な教育の必要性が求められた一二世紀初頭の社会情勢も、ともすれば現代の状況と重なるように思える部分もある。とはいえ、とくにアリストテレスな分類における理論学の下位区分は、かれの質料形相論を当然ながら前提としているし、自然学に属する学問でも、数学のみによって記述可能とは考えられていないなど、個々

の学問の内容や方法論の面では「近代化」前後で大幅に異なっているのは、著者の述べる通りである。それを踏まえた上での評者の所感としては、中世と近代の学問体系を本質的に隔てる最も重要な要素は、数学的手法の確立にあるように思える。本書でもまさに論じられている通り、人文科学と社会科学を分ける発想は、後者について、統計や確率論などを適用することにより部分的に一般化可能であるという意識が無ければ生じ得ず、その意識は数学によって普遍的法則が探求しようという観念を前提とするからである。中世との連続性と断絶性という点からみれば、ヴィンデルバントの言葉で言えば「個性記述的」な領域と「法則定立的」な領域の峻別はアリストテレスの時代より存在していたが、その中間領域、すなわち社会科学は近代の産物と言える。一方で、宗教からの脱却は、個々の学問の存在意義、つまり何のための知識なのかという部分について、社会それ自体とともに、根本的な転換を促すことになったのである。分類的歴史からみれば、現代社会は二回目の学問形成の過程を歩んでいるのではないだろうか。一度目は神の秩序のもとで、此度は人間の秩序のもとで。

【凡例】

CCCM: *Corpus Christianorum Continuatio Mediaevalis*; CCSL: *Corpus Christianorum Series Latina*; PL: *Patrologia Latina*

- (1) 古代における自由学芸については、H・I・マラー「横尾壮英、飯尾都人、岩村清太訳」『古代教育文化史』岩波書店、一九八五年および、同「岩村清太訳」『アウグスティヌスと

古代教育の終焉』知泉書館、二〇〇八年。より詳細なものとしては、I. Hadot, *Arts libéraux et philosophie dans la pensée antique. Contribution à l'histoire de l'éducation et de la culture dans l'antiquité*, Paris: Vrin, 2005.

- (2) 中世における教育については、P・リシエの著作がもとも網羅的である。ピエール・リシエ「岩村清太訳」『ヨーロッパ成立期の学校教育と教養』知泉書館、二〇〇二年。他にも、岩村清太『ヨーロッパ中世の自由学芸と教育』知泉書館、二〇〇七年。また、『中世思想研究』第五六～五七号(二〇一四～二〇一五年)における特集「中世の自由学芸」に収められている各論文は、やや個別事例的ではあるが、古代ギリシアからスコラ期に至るまでの学問観の変遷を上手く纏めている。

- (3) カペッラと『結婚』の概要については、廣川洋一「自由三学科の成立―マルティアヌス・カペラにおける―」、『新岩波哲学講座14：哲学の原型と発展』岩波書店、一九八五年所収、三二〇―三四七頁。水落健治「マルティアヌス・カペラ『フィロロギアとメルクリウスの結婚』」、『中世思想研究』第五六号、二〇一五年、一二三―一二九頁。

- (4) 聖書を引き合いに出し、七自由学芸の教育を正当化したテクストとしてもっとも重要なのは、アルクインの『文法学』*De grammatica*の冒頭に付された「真の哲学の対話」*Disputatio de vera philosophia*と題された小論考だろう。アルクインは「知恵は家を建て、七本の柱を刻んで立てた」(「箴言」九・一)という聖書の記述を引き合いに出して、キ

リスト教徒に対する自由学芸の教育を正当化した。Alcuin,

Disputatio de vera philosophia, PL 101, col. 849-854; 「山崎裕子訳」『中世思想原典集成 6 : カロリング・ルネサンス』平凡社、一九九二年所収、一一七—一二一頁。なお、「箴言」の記述と七自由学芸を最初に結びつけたのは、六世紀のカッシオドルスだと思われる。Cassiodorus, *Institutiones divinarum et saecularium literarum*, II, 2, ed. R. A. B. Mynors, Oxford: Clarendon Press, 1937, p. 87. (多子多津子訳)『中世思想原典集成 5 : 後期ラテン教父』平凡社、一九九三年所収、三四七頁。

(5) この定義は、自由学芸と哲学を擬人化して描いたものとして有名な、ランズベルクのヘッラードによる『悦楽の園』*Hortus Deliciarum* に見られる。“Septem liberales artes, que ideo dicuntur liberales, quia liberant animum a terrenis curis et faciunt eum expeditum ad cognoscendum creatorem”. Herrad of Landsberg, *Hortus Deliciarum*, fol. 30v, ed. R. B. Green and T. J. Brown, London: Warburg Institute, 1979, vol. 1, no. 115.

(6) 「自由」と「書物」を結びつける発想はカッシオドルスに見られる。“...de arte grammatica, quae est uidelicet origo et fundamentum liberalium literarum. Liber autem dictus est a libro, id est arboris cortice dempto atque liberato.” Cassiodorus, *Institutiones divinarum et saecularium literarum*, II, 4, p. 91. この定義はイシドルスやラバヌス・マウルスにも継承されていくが、言語学的には誤りであることが分かって

いる。

(7) 自由学芸の定義および現代教育の場におけるリベラル・アーツとの関連性については、以下の論者が示唆に富んでいる。関沢和泉「自由学芸と文法学」、『世界哲学史 3—中世 I : 超越と普遍に向けて』筑摩書房、二〇二〇年所収、一〇三—一二六頁。より一般的には、M. Teeuwen, *The Vocabulary of Intellectual Life in the Middle Ages*, Turnhout: Brepols, 2003, pp. 364-366.

(8) quadrivium というラテン語は、真理へと至る四つ quadrivium の道 via を意味するボエティウスの造語であるが、かれ自身はゲラサのニコマコス (ca. 50-ca. 150) の『算術入門』に見られる、「四つの方法 *ai téocapes méthodoi*」という表現を念頭に置いて用いたと推定される。Boethius, *De arithmetica*, I, 1, CCSL, 94A, p. 11. cf. J. Guillaumin, “Boethius’s De institutione arithmetica and its Influence on Posterity,” in *A Companion to Boethius in the Middle Ages*, Leiden/Boston: Brill, 2012, pp. 135-162; 周藤多紀「ボエティウスと自由学芸の伝統」、『中世思想研究』第五六号、二〇一四年、一二〇—一二二頁。trivium について、quadrivium の対となる語として九世紀に作られたと考えられているが、普及するのは十一世紀以降である。最古の使用例のひとつは、エリウゲナによるプリスキアヌスへの註解に見られる (Leiden, Bibliothek der Universiteit, B.P.L. 67, fol. 9r)° cf. Pio Rajna, “Le denominazioni trivium e quadrivium,” *Studi Medievali. Nuova Serie*, 1 (1928), pp. 4-36; A. Luhtala,

“On Early Medieval Divisions of Knowledge,” in *Carolingian Scholarship and Marianus Capella: Ninth-Century Commentary Traditions on De Nuptiis in Context*, Turnhout: Brepols, 2011, pp. 75–98 (esp. p. 92, n. 52).

- (9) “Mathematica, quam Latine possumus dicere doctrinalem, scientia est quae abstractam considerat quantitatem.” Cassiodorus, *Institutiones*, II, 21, p. 130.

- (10) Boethius, *De arithmetica*, I, 1, p. 11.

- (11) ただし、婚姻と結婚を描いた一―二巻ののち、三―五巻が文法学、修辞学、弁証法を扱い、残りの六―九巻が算術、幾何学、音楽、天文学に充てられていることから、構成上の区別は意識されていたのかもしれない。

- (12) “Philologia quippe studium rationis, Mercuriusve facundiam sermonis insinuat”; “SOPHIAM sapientiam. In hoc loco si quis leges allegorie intentus perspexerit, inveniet Mercurium facundi sermonis, hoc est copiosae eloquentiae, formam gestare. <...> Hinc est quod Tullius [= Cicero] in primo *De rethorica* libro ait, ‘Eloquentia sine sapientia numquam profuit, sepe nocuit; sapientia vero absque eloquentia sepe profuit, numquam nocuit.’” Johannes Scottus Eriugena, *Annotiones in Marcianum*, Prol.; 6, 20, ed. C. E. Lutz, Cambridge, MA: Mediaeval Academy of America, 1939, p. 3: 9. なお、引用部分にもある通り、知恵と雄弁の結合という発想はキケロに遡る (*De inventione*, I, 1)。

- (13) “...descriptis tribus, grammatica videlicet, dialectica atque

rhetorica, quae tantum in sermone sunt, ingressurus est ad describendum artium quattuor reliquarum quadrivium quae in intellectu consistunt.” Remigius of Auxerre, *Commentum in Martianum Capellam*, 285.6, ed. C. E. Lutz, Leiden: Brill, 1962–65, p. 118.

- (14) 例えど、ボエティウスの『トピカの差異について』 *De topicis differentiis* では、弁証法は「喜びとは最大の善であるか？」や「人は結婚すべきか？」などの普遍的な主題を扱う一方で、修辞学は「キケロは人々の命令なしにローマ市民を殺害したため、共和制が揺らいでいる時期に亡命を推し進めるべきか？」といったような、特定の人物や時間、行為などの付帯要素を伴ったより限定的な主題を扱うという点において区別されている。Boethius, *De topicis differentiis*, PL 64, col. 1177C–D. トリウィウムの一体性ないしは相違性については、おもに一二世紀以降を対象にした研究であるが、以下のものが示唆に富んでいる。K. M. Fredborg, “The Unity of the Trivium,” in *Sprachtheorien in Spätantike und Mittelalter*, Tübingen: G. Narr, 1995, pp. 325–338.

- (15) artes mechanicae は多様な意味を内包する概念であり、軽率に訳出できる語ではないが、本書における隠岐氏の訳に合わせて「機械学芸」と呼ぶことにする。この語の意味については、五百旗頭氏によるサン＝ヴィクトルのフーゴの「ディダスカリコン」における解説を参照。『中世思想原典集成9：サン＝ヴィクトル学派』平凡社、一九九六年、一七五―一七六頁、註三七。

- (16) 機械学芸の歴史に関する最良の概説は'E. Whitney, "Paradise Restored. The Mechanical Arts from Antiquity through the Thirteenth Century," *Transactions of the American Philosophical Society*, 80/1 (1990), pp. 1-169. 田中芳子 P. Sternagel, *Die artes mechanicae im Mittelalter: Begriffs- und Bedeutungs geschichte bis zum Ende des 13. Jahrhunderts*, Kallmunnz: Lassleben, 1966; J. Bacher, "Artes Mechanicae," in *Erkenntnis, Erfindung, Konstruktion: Studien zur Bildgeschichte von Naturwissenschaften und Technik vom 16. bis zum 19. Jahrhundert*, Berlin: G. Mann, 2000, pp. 35-49. 邦語で読めるものとして、ケムール・シュルツ〔魚住昌良訳〕「アルテス・メカニカニ：ローロニハ手工業技能の評価と中世都市におけるその社会的地位」『比較都市研究』第二十八巻「二〇〇九年」一三二-一三八頁。
- (17) cf. Martianus Capella, *De nuptiis Philologiae et Mercurii*, 9.891, "Cui Delius Medicinam suggerit Architectonicamque in praeparatis assistere, 'sed quoniam his mortalium rerum cura terrenorumque solertia est nec cum aethere quicquam habent superisque conferre, non incongrue, si fastidio respuntur, in senatu caelico reticebunt ab ipsa deinceps virgine explorandae discussus,'" ed. J. Willis, Leipzig: Teubner, 1983, p. 339.
- (18) 例えば、九世紀のレオン (Léon) の司教座聖堂学校で教鞭をとったマルティヌスは、農夫や縮絨工、石工らの知識を劣った学芸 minor ars とあてがう。cf. J. J. Contreni, "John Scotus, Martin Hibernensis, the Liberal Arts, and Teaching," in *Insular Latin Studies: Papers on Latin Texts and Manuscripts of the British Isles, 550-1066*, Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1981, pp. 23-44.
- (19) B. Bischoff and B. Löfstedt eds., *Anonymous ad Cuiuanum: Expositio Latiniarum*, CCSL 88D, Turnhout: Brepols, 1992.
- (20) "Quae triuariae diuiduntur, id est aut ars animi aut corporis aut animi simul et corporis. Verbi gratia: artes animi sunt philosophia, lex iuris scita, rethorica, grammata, astrologia, mussica (sic), poema et reliqua, in quibus mens meditare solet. Artes corporis oneris gestamen, cursus, saltus, iaculatio telorum funda uel arcu rotante et reliqua, in quis corpus laborat et torquetur. Ars animi et corporis gubernatio, nauigatio, aedificatio, agricultura, palestra, medicina et reliqua, in quibus mens simul et corpus quaestus sui profectum querit." Anonymous, *Ad Cuiuanum*, Prol., p. 2f. この分類理論は四世紀の文法学者アウグスティヌスに遡ると思われる。ただし、かれの分類では航海術や商術が取り上げられていない。cf. Victorinus, *Artes grammaticae*, Prol., ed. H. Keil, Grammatici Latini, 4, Lipsiae: Teubner, 1857, p. 187.
- (21) "Sed sciendum est omnes artes et omnes linguas et omnes scientias primitus fuisse ac diuinitus in Adam, qui spiritum sapientiae habuisse scribitur: omne enim, quod fuit, ipsum, quod erit. Sed postea, sicut suum multiplicatum est genus, ita et artes. <...> multa genera artium, in Adam quae indiuisibiliter aut originaliter uel etiam causaliter inerant,

in sua postea posteritate multuarie et multis modis orta atque sunt acta." Anonymous, *Ad Cuiusmodi*, Prol., p. 2.

- (22) "Tunc exsurgens virginis mater poscit de Iove superisque cunctis, uti sub conspectu omnium, quicquid sponsalium nomine praeparerat Maigena, traderetur ac demum dos a virgine non deesset." Capella, *De Nuptiis*, 2.217, p. 57.
- (23) "DOS A VIRGINE ac si dixisset: Postquam Mercurius dederit septem liberates artes, tunc virgo dabit septem mechanicas." Eriugena, *Anotationes*..., 79.12, p. 74; Remigius, *Commentum*..., 79.11, p. 78.

- (24) "<...> ipse disciplinae [= artes liberales] sola ipsa anima percipiuntur nec aliunde assumuntur, sed naturaliter in anima intelliguntur. Non sic ceterae artes [= artes mechanicae] quae imitatione quadam vel excogitatione humana fiunt, ut architectoria et caetera." Eriugena, *Anotationes*..., 170.14, p. 96f.

- (25) cf. Whitney, "Paradise Restored...", pp. 70-73.

- (26) 本書の冒頭では、エリウゲナが「織物技術、農業、建築術、武術、商業、料理、冶金術など幅広い領域」を挙げていると述べられているが(二〇頁)、エリウゲナ自身の真作においてこの分類は明示されていない。隠岐氏が依拠していると思われる Stephen Parcel の著作を含め、いくつかの文献がこの分類をエリウゲナに帰しているが、いずれも典拠について不明瞭である。

- (27) サン＝ヴィクトルのフーゴは、機械学芸を初めて哲学の体系

内に取り込んだ人物としてよく取り上げられる。かれは主著『ティダスカリコン』において、機械学、兵器学、商学、農学、狩猟学、医学、演劇学の七種を挙げている。Didascalicon, II, 20-27.

- (28) Teeuwen, *The Vocabulary of Intellectual Life*..., pp. 395-397.

- (29) "Philosophia est rerum humanarum diuinarumque cognitio cum studio bene uiuendi coniuncta."; "In quantum homini possibile est, probabilius scientia." Isidorus, *Etymologiae*, II, xxiv, 1; 7, ed. P. K. Marshall, Paris: Les Belles Lettres, 1983, p. 100f.; 106f. 前者について「キケロ」後者は「カッシオドルス」からの引用である。

- (30) "Omnibus diuina stimulante gratia sapientiam discernere uolentibus necesse est ut sciant philosophia quid sit, quae fons est omnis artis et disciplinae et omnium uirtutum magistra." Clemens Scottus, *Arts grammatica*, ed. A. M. Puckett, PhD Thesis, University of California, 1978, p. 51.

- (31) "Nemo intrat in celum nisi per philosophiam." Eriugena, *Anotationes*..., 57.15, p. 64; cf. Remigius, *Commentum*..., 57.14, "Nemo enim caelum potest conscendere nisi per philosophiam, id est per amorem sapientiae."

- (32) 一二世紀以前の哲学の分類理論については、先行研究においても等閑視されがちだが、出発点となるのは B・ベンションの論である。B. Bischoff, "Eine Verschlörene Einteilung der Wissenschaften," *Archives d'histoire doctrinale et littéraire du Moyen Âge*, 25 (1958), pp. 5-20. 他に M. Evans, "The

Ysagoge in Theologiam and the Commentaries Attributed to Bernard Silvestris," *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, 54 (1991), pp. 1-42; Luhlala, "On Early Medieval Divisions of Knowledge", I. O'Daly, "Diagrams of Knowledge and Rhetoric in Manuscripts of Cicero's *De Inventione*," in *Studies in Medieval and Renaissance Book Culture: Manuscripts of the Latin Classics 800-1200*, Leiden: Leiden University Press, 2015, pp. 77-105.

- (33) 中世全体を通じて哲学の分類に関する最良の見取り図を与えてくれるのは、未だにワイスハイブルの論考であろう。J. A. Weisheipl, "Classification of the Sciences in Medieval Thought," *Medieval Studies*, 27 (1965), pp. 54-90; Idem, "The Nature, Scope, and Classification of the Sciences," in *Sciences in the Middle Ages*, Chicago: Chicago University Press, 1980, pp. 461-482. また、G. d'Onofrio ed., *La divisione della filosofia e le sue ragioni: lettura di testi medievali (VI-XIII secolo)*, Roma: Avagliano, 2001. 写本レベルの紹介としては、M・グラーブマンの著作もまったく色褪せていない。M. Grabmann, *Geschichte der scholastischen Methode*, vol. 2, Freiburg: Herber, 1911, pp. 28-48. 邦語としては、上智大学中世思想研究所編『中世の学問観』創文社、一九九五年、および前出の『中世思想研究』の特集が挙げられる。

- (34) cf. Augustinus, *De civitate Dei*, VIII, 4; Isidorus, *Etymologiae*, II, xxiv, 2-7. セクストゥス・エンペイリコス (2-3c) は、クセノクラテス (396-314 B.C.) がプラトニックな三分法を採

用していたと証言している。この分類法の起源については、P. Hador, "Les divisions des parties de la philosophie dans l'Antiquité," *Museum helveticum*, 36 (1979), pp. 201-223.

- (35) プラトニック三分法における論理学 *logica* は、アリストテレス的な意味での三段論法に基づく推論技術に限定されている訳ではなく、言語を扱う学問一般の類概念として使用されている。これはギリシア語の *λόγος* が、理性 *ratio* と言葉 *sermo* という二つの意味を内包していることに起因する。一二世紀になると、*logica* という語の持つ二重性が明確に意識されるようになる。cf. John of Salisbury, *Metalogicon*, I, 10; Hugo of St. Victor, *Didascalicon*, I, 11. 論理学の概念や分類を巡る展開については、Y. Iwakuma, "The Division of Philosophy and the Place of the Trivium from the 9th to the Mid-12th Centuries," in *Medieval Analyses in Language and Cognition: Acts of the Symposium the Copenhagen School of Medieval Philosophy, January 10-13, 1996*, Copenhagen: Det Kongelige Danske Videnskabsbernes Selskab, 1999, pp. 165-190. なお、論理学の下位分類に文法学が追加されるようになるのは九世紀に文法学の重要性が増してからである。それ以前の時代においては、文法学はもともと基礎的な知識であるが故に、哲学には含まれないと考えられていた。

- (36) この置き換えとその後の分類理論に与えた影響については、未だ十全に研究されているとはいえない。さしあたり、S. Leanza, "La classificazione dei libri Salomonici e i suoi Riflessi sulla questione dei rapporti tra Bibbia e scienze

profane, da Origene agli scrittori medioevali." *Augustinianum*, 14 (1974), pp. 651-666; G. Dahan, "Origène et Jean Cassien dans un 'Liber de philosophia Salomonis'", *Archives d'histoire doctrinale et littéraire du Moyen Âge*, 52 (1985), pp. 135-162 (esp. 139-143).

- (37) "Generales disciplinae, quibus ad rerum scientiam preventur, tres sunt, quas Graeci ethicam, physicam, enopticen appellarunt. <...> Nonnulli sane apud Graecos etiam logicen <...> quatro in numero posuere." Origenes, *Commentarium in Cantico canticorum*, Prol., ed. W. A. Baehrens, Leipzig: J. C. Hinrichs, 1925, p. 75. なお、オリゲネスの『雅歌註解』のギリシア語原典は現存しておらず、中世において読まれていたのも、ここに引用したルフィヌスによるラテン語訳版である。
- (38) "... aut de logica, pro qua nostri θεωλογίην sibi vindicant." Hieronymus, *Epistola*, XXX, 1, ed. Jérôme Labourt, vol. 2, Paris: Les Belles Lettres, 1951, p. 31. 写本によつては θεωλογίην 或は theoreticen や theoreticen となつてゐる場合もある。cf. Dahan, "Origène et Jean Cassien...", pp. 139-143.
- (39) この学問は、アリストテレス自身の言葉で言えば形而上学 metaphysica であるが、初期中世では theologia と呼ばれてゐた。
- (40) 論理学を哲学に含めるか否かについては古代から論争があり、一般的にプラトンの後継者たち（アカデメイア学派）やストア学派は哲学の一部と考え、アリストテレスに従う者たち（ヘリパトス学派）はあくまで「道具」として考え

てゐた。cf. P. Hadot, "La logique, partie ou instrument de la philosophie?", in *Commentaire sur les Catégories*, Leiden: Brill, 1990, pp. 183-188. 九世紀には、アリストテレス的区分法に論理学を追加する理論も登場する。拙稿「史料紹介：『ソロモンの哲学の書』 (*Liber de philosophia Salomonis*)」『史苑』第八一卷一号、二〇一〇年、一五五—一八二頁を参照。

(41) 例えば、アリストテレスは実践学について、人間の行為そのものを扱う倫理学、家政学、政治学とは別に、外的なものに関わる行為（＝創作）を扱う詩学 poesis を指定してゐたが、これは初期中世ではほとんど知られていなかった。また、クアドリウィウム（とりわけ音楽と天文学）を数学の下位分類として位置づけるのも、アリストテレスの思想とは必ずしも一致しない。

- (42) "Inspectiva dicitur, qua supergressi visibilia de divinis aliquid et caelestibus contemplamur, eaque mente solummodo contuemur, quoniam corporeum supergrediuntur aspectum." Cassiodorus, *Institutiones*, II, 6, p. 111. カッシオドルスの『聖俗学問綱要』は自由学芸のテキストブックとして、カベッラの『結婚』などとともに広く読まれた。なお、カッシオドルス自身は、アンモニオスの『イサゴギー註解』を参考にしてゐる。cf. I. Morresi, "Le redazioni interpolate ΦΔ delle Institutiones di Cassiodoro," PhD Thesis, Scuola Normale Superiore, 2019, pp. 148-158. アンモニオスの分類理論については、J. P. Schneider, "Les définitions de la philosophie dans l'antiquité tardive: Ammonios, Commentaire sur l'Isagoge

de Porphyre, 9, 25-16, 20 (Busse).” *Revue d'histoire et de philosophie religieuses*, 145/1 (2013), pp. 1-38.

(43) Origenes, *Comm. Cant. cant.*, Prol., p. 75.

(44) オリゲネスによる新プラトン主義的な学問観では、各学問の階梯（ヒエラルキー）が明確に指定されている。キリスト教徒はまず倫理学において道德的な素養を身につけ、次いで自然学において諸々の事物の本性を学び、この世の物質的なものの脆さや儚さを理解したのち、最後に観想学において見えざる永遠の神の観照へと至るとされている。cf. Origenes, *Comm. Cant. cant.*, Prol., p. 76. カッシオドルスは自然学を、「ただ精神によつてのみ」探求される理論学の種として指定しているが、自然学は物質的なものに関わり、それは精神と対になる感覚的な経験なしには探求され得ないため、内容的には矛盾をきたしている。カッシオドルスがこの点に自覚的であったかは定かではない。以下を参照のこと。I. Hadot, “Les parties de la philosophie chez Cassiodore et chez Origène,” in *Arts libéraux et philosophie dans la pensée antique: contribution à l'histoire de l'éducation et de la culture dans l'antiquité*, Paris: Vrin, 2005, pp. 299-301; Morresi, “Le redazioni interpolate...,” p. 148f.

(45) ただし、例外的な事例ではあるが、ランスの教師であったジェルベール・ドリーヤック（のちの教皇シルヴェステル2世）とマクデブルクの教師オトリクスによる、自然学と数学の類種関係を巡る討論会が九八一年に開催されたことは特筆に値する。この討論会については、H. H. Kottüm,

Richer von Saint-Remi: Studien zu einem Geschichtsschreiber des 10. Jahrhunderts, Stuttgart: Steiner Verlag Wiesbaden, 1985, pp. 83-92; P. Riché, *Gerbert d'Aurillac, le pape de l'an mil*, 2ed. Paris: Fayard, 2006, pp. 57-63; C. S. Jaeger, “Gerbert versus Ottrich: Spielregeln Einer Akademischen Disputation Im 10. Jahrhundert,” in *Die Spielregeln der Mächigen: Mittelalterliche Politik zwischen Gewohnheit und Konvention*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 2010, pp. 43-68.

(46) 一二世紀における社会と知的世界の変容については、未だにハスキンスの著作が第一に参照されるべきである。C. H. ハスキンス〔野口洋二訳〕『十二世紀ルネサンス』創文社、一九八五年・同〔別宮貞徳・朝倉文市共訳〕みすず書房、一九八九年（講談社学術文庫、二〇一七年）。アラビア世界との関わりとアリストテレスの著作の翻訳活動については、伊東俊太郎『十二世紀ルネサンス：西欧世界へのアラビア文明の影響』岩波書店、一九九三年。

(47) ソールズベリーのジョンとかれの時代の学問的潮流については、甚野尚志『十二世紀ルネサンスの精神：ソールズベリーのジョンの思想構造』知泉書館、二〇〇九年。

(48) この分類理論は、かれの『プラトン註解』や『ボエティウス註解』に見られる。William of Conches, *Glosae super Platonem*, V, ed. E. Jeuneau, CCCM 203, p. 11; Idem, *Glosae super Boethium*, I, pr. 1, ed. L. Nauta, CCCM 157, p. 32. 前者については、邦訳（抄訳）もある。〔大谷啓治訳〕『プラトン・ティマイオス逐語註解』、前掲書『中世思想原典集成8』所収、

四一四頁。なお、音楽については更なる下位分類が展開されているが、図では省略した。

- (49) “Quoniam, ut ait Tullius [= Cicero] in prologo Rheroticorum, eloquentia sine sapientia nocet, sapientia vero sine eloquentia etsi parum, tamen aliquid, cum eloquentia autem maxime prodestm errant qui postposita proficiente et non nocente adhaerent nocenti et non prodicenti. Id namque agere est Mercurii et Philologiae coniugium <...> solve.” William of Conches, *Philosophia mundi*, I, Prol., 1, ed. G. Maurach, Pretoria: University of South Africa, 1980, p. 17; 「神崎繁・金澤修一・寺本稔訳」 「宇宙の哲学」 「前掲書『中世思想原典集成8』」 所収、二八五頁。本文に合わせて、一部訳を変更している。

- (50) かれの学問観については、K・リーゼンフーバー「村井則夫訳」 「サン＝ヴィクトルのフーゴーにおける学問体系」 「前掲書『中世の学問観』」 所収、一一三―一四八頁。

- (51) ウィリアムは知恵 sapientia と哲学 philosophia を同一視している。⁸ “Sapientiae uel philosophiae sunt duae species: theoria et practica. id est contemplatio et actio.” *Glosae super Boethium*, I, pt. 1, p. 30. なお、この分類それ自体の発想は、(ウィリアムが知っていたかどうかは定かではないが) 一〇世紀の写本に先例がある。⁹ cf. Evans, “The Ysagoge in Theologiam,” p. 8f.; O’Daly, “Diagram of Knowledge,” pp. 77-79. ただし、これらの写本には区分図 stemmata のみが描かれており、『結婚』に関する言及はない。

- (52) 知恵と雄弁の関係については、J・ワードが浩瀚な文献註とともに紹介している。¹⁰ J. O. Ward, *Classical Rhetoric in the Middle Ages: The Medieval Rhetors and Their Art 400-1300, with Manuscript Survey to 1500 CE*, Leiden: Brill, 2019 によれば “Wisdom and Eloquence: The Integrated Scheme of Knowledge” の項を参照。